

## 試資料の保管

試験計画書、標本、生データ、記録文書、最終報告書、その他本試験に係る試資料は、試資料保管施設に保管する。

保管期間は、最終報告書提出後、原則として5年間とする。なお、この期間にあっても標本については品質が評価に耐え得る期間保管する。

## 試験責任者（最終報告書作成者）の署名及び日付

試験管理部、（兼）病理検査部

長野 嘉介

---

2007年 2月 5日

## 陳 述 書

試験名：トルエンのマウスを用いた極低濃度暴露試験（22時間／日、7日間暴露）

本試験は、試験計画書（試験番号 0650）に基づき実施された。

本報告書はその試験結果に基づいてまとめられたものに相違ありません。

中央労働災害防止協会  
日本バイオアッセイ研究センター

試験責任者 長野 嘉介  
2007年 2月 5日

運営管理者 山本 静護  
2007年 2月 5日

## 要約

化学物質の極低濃度暴露による生体影響検出の技術開発を目的として、生活環境中の濃度に即した極低濃度のトルエンを C57BL/6 Cr Slc 雄マウスに 22 時間/日、7 日間全身暴露(経気道投与)し、遺伝子発現解析用の肺及び肝臓組織を採取した。

本試験は、被験物質投与群 3 群と対照群 1 群の計 4 群の構成で、各群 9 匹、合計 36 匹のマウスを用いた。暴露濃度は、70、200 及び 700 ppb とした。対照群は清浄空気による換気のみとした。吸入チャンバー内の被験物質濃度は、固相吸着-溶媒抽出法により測定した。暴露開始後 1 日目、3 日目及び 7 日目に各群 3 匹の動物を解剖し、肺と肝臓から遺伝子発現解析のための RNA 用サンプルを採取するとともに、病理組織学的検査用サンプルを採取した。

吸入チャンバー内の被験物質濃度は、目標暴露濃度 0、70、200 及び 700 ppb に対し、測定値の平均±偏差(最低~最高値)は、それぞれ  $2 \pm 1$  ppb (1 ppb~4 ppb)、 $76 \pm 3$  ppb (73 ppb~82 ppb)、 $202 \pm 9$  ppb (191 ppb~219 ppb) 及び  $695 \pm 19$  ppb (670 ppb~724 ppb) であった。

剖検と病理組織学的検査では、全動物とも肺と肝臓に特記すべき所見を認めなかった。遺伝子発現解析のための RNA 用サンプルは試験委託者に送付した。

## I 試験材料

### I-1 被験物質の性状等

#### I-1-1 名称等

名 称： トルエン(Toluene)

CAS No.： 108-88-3

#### I-1-2 示性式及び分子量

示 性 式：  $C_6H_5CH_3$

分 子 量： 92.14

#### I-1-3 物理化学的性状等

性 状： 無色透明の液体

沸 点： 110.6℃

蒸 気 圧： 2.9 kPa (20℃)

比 重： 0.8669 (20℃/4℃)

### I-2 被験物質の使用ロット等

性 状： 高圧標準ガス (47 L ボンベ、充填量 8.86 Mpa)

標準ガスボンベの濃度： 105 ppm (高千穂商事(株) 検査成績書データ)

製 造 元： 高千穂商事(株)

使用ロット番号： CQC344 (2006/7/25～2006/7/26)

CQC345 (2006/7/26～2006/7/27)

CQC346 (2006/7/27～2006/7/29)

CQC347 (2006/7/29～2006/7/30)

CQC349 (2006/7/30～2006/8/1)

保管条件： 室温で保管 (516 室)

### I-3 被験物質の特性

使用した被験物質の特性は、GC/MS (Agilent Technologies 社製 Agilent Technologies 5973N) を用いて定性した。その結果、トルエンに相当する分子イオンピーク及びフラグメントピーク (文献 1) を確認した (図 1)。

### I-4 試験動物

動物は、日本エスエルシー (株) (静岡県浜松市湖東町 3371 番地の 8) 春野支所の C57BL/6 Cr Slc マウス (SPF) の雄を使用した。

1 日目及び 3 日目解剖動物は、30 匹を 10 週齢 (2006 年 5 月 3～4 日生まれ) で導入し、検疫 (5 日間)、馴化 (1 週間) を実施した後、発育順調で一般状態に異常を認めなかった動物から、体重値の中央値に近い 24 匹 (群構成時体重範囲、25.6～30.1g) を選別し、

試験に用いた。7日目解剖動物は、20匹を9週齢（2006年5月10～11日生まれ）で導入し、検疫（5日間）、馴化（1週間）を実施した後、発育順調で一般状態に異常を認めなかった動物から、体重値の中央値に近い12匹（群構成時体重範囲、26.0～28.3g）を選別し、試験に用いた。

## II 試験方法

### II-1 投与

#### II-1-1 投与経路

投与経路は全身暴露による経気道投与とした。

#### II-1-2 被験物質の投与方法

試験動物を収容した吸入チャンバー内に、設定濃度に調整した被験物質を含む空気を送り込み、動物に全身暴露した。

#### II-1-3 投与期間

投与期間は1日22時間暴露（70 ppb 群；午後0時30分から翌日午前10時30分、200 ppb 群；午後0時15分から翌日午前10時15分、700 ppb 群；午後0時から翌日午前10時）で最長7日間とし、暴露開始後1日目と3日目の途中解剖群を設けた。試験スケジュールを図2に示した。

#### II-1-4 投与濃度

投与濃度は、70、200及び700 ppbの3段階に設定した。なお、対照群は清浄空気による換気のみとした。

#### II-1-5 投与経路、投与期間及び投与濃度の設定理由

投与経路は室内環境での曝露経路に合わせ、全身暴露による経気道投与とした。

投与期間は、継続暴露による影響を検索するため、最長7日間とし、暴露開始後1日目と3日目の途中解剖群を設けた。投与時間は、室内環境での曝露形態（24時間）から、動物の飼育作業に要する時間（2時間）を差し引いて、1日22時間とした。また、投与時刻は、解剖時間を午前10時から12時とするため、70 ppb 群は午後0時30分から翌日午前10時30分、200 ppb 群は午後0時15分から翌日午前10時15分、700 ppb 群は午後0時から翌日午前10時とした。

投与濃度はトルエンの室内濃度指針値である70 ppbを考慮して、70、200及び700 ppbの3段階（公比約3）に設定した。

#### II-1-6 被験物質の発生方法と濃度調整

吸入装置のシステムを図3に示した。トルエン標準ガスを吸入チャンバー上部のラインミキサーに供給し、新鮮空気と混合することにより、設定濃度の被験物質を吸入チャンバ

ーに送り込んだ。トルエン標準ガスのラインミキサーへの供給量は、流量計を用いて調節した。

なお、新鮮空気はHEPAフィルターと活性炭フィルターにより濾過して使用した。

## II-1-7 被験物質濃度の測定

吸入チャンバー内の被験物質濃度は、固相吸着-溶媒抽出法により毎日測定した。

### (1) 被験物質の捕集方法

サンプリング用ポンプとして高負荷型ミニポンプ(MP-Σ100H 柴田科学製)を用いて、動物を収容したケージの上部に設置した捕集管(ORBO™-91 Tube, Large SUPELCO製)に吸入チャンバー内の空気を吸引した。サンプリング用ポンプの吸引流量は0.5 L/分とした。捕集時間は暴露時間(暴露開始から暴露停止まで)に合わせ22時間とした。

### (2) 捕集管の前処理及び分析条件

捕集管の活性炭(1層及び2層)を取り出し、各々、かつ色バイアルびん(柴田科学製)に入れ、二硫化炭素(和光純薬工業製 作業環境測定用)約2gを入れ、蓋をしてダイレクトミキサー(サーマル化学産業製)を用いて1時間振とうした。200 ppb群と700 ppb群の活性炭1層は、検量線の所定の範囲に入るように段階希釈した。その後、バイアルビン(Agilent Technologies社製2 mL用バイアルビン)に入れ、蓋をしてガスクロマトグラフ(ヒューレットパッカード社製 HP5890A)により測定した。

ガスクロマトグラフの分析条件は、カラムはUltra-1(0.2mmφ×50m)、キャリアーガスはヘリウム、検出器はFIDを用い、カラム温度は80°C→(10°C/min)→150°C(1min)、注入口温度は200°C、検出器温度は200°C、試料注入量は1μLとした。

## II-2 動物管理

### II-2-1 各群の使用動物数

投与群3群及び対照群1群の計4群を設け、各群9匹の動物を用いた。また、暴露開始後1日目、3日目及び7日目の解剖期を設けた。

群番号	群名称	解剖期	雄 使用動物数(動物番号)
0	対 照 群	1 日 目 解 剖	3 匹 (1001~1003)
		3 日 目 解 剖	3 匹 (1004~1006)
		7 日 目 解 剖	3 匹 (1007~1009)
1	70 ppb 群	1 日 目 解 剖	3 匹 (1101~1103)
		3 日 目 解 剖	3 匹 (1104~1106)
		7 日 目 解 剖	3 匹 (1107~1109)
2	200 ppb 群	1 日 目 解 剖	3 匹 (1201~1203)
		3 日 目 解 剖	3 匹 (1204~1206)
		7 日 目 解 剖	3 匹 (1207~1209)
3	700 ppb 群	1 日 目 解 剖	3 匹 (1301~1303)
		3 日 目 解 剖	3 匹 (1304~1306)
		7 日 目 解 剖	3 匹 (1307~1309)

## II-2-2 群分け及び個体識別方法

群分けは、投与開始日に行った。供試動物の各群への割り当ては、一般状態及び体重の推移に異常を認めない動物を体重の重い順より各群に 1 匹ずつ割り当て、二巡目からは各群の動物の体重の合計を比較して、小さい群より順に体重の重い動物を割り当てることにより、群間の体重の偏りを小さくする群分け方法（適正層別方式）により実施した。ただし、7 日目解剖動物は週齢が他の解剖期の動物と異なるため、試験番号 4409 として別途群構成を行った。

動物の個体識別は、検疫期間、馴化期間及び投与期間ともケージに個体識別番号を記したラベルを付すことにより行った。なお、室の扉に試験番号、動物種及び動物番号を表示した。

## II-2-3 飼育条件

### (1) 飼育環境

検疫期間中は検疫室（517 室）で、馴化期間及び投与期間中は、吸入試験室（516 室）の吸入チャンバー内で動物を飼育した。

検疫室、吸入試験室及び吸入チャンバー内の環境条件及び使用したケージを以下に示した。検疫室の温度と湿度、吸入試験室の温度は実測値（最低値～最高値）を< >内に、また、吸入チャンバー内環境の測定結果を表 1~3 に示した。検疫室、吸入試験室及び吸入チャンバー内の環境には、動物の健康状態に影響を与えるような大きな変化は認められなかった。

温 度 : 検疫室 ; 23±2℃ <517 室 ; 22.7℃~23.2℃>  
吸入試験室 ; 21±2℃ <516 室 ; 21.2℃~22.5℃>  
吸入チャンバー内 ; 20~24℃  
湿 度 : 検疫室 ; 55±15% <517 室 ; 51%~53%>  
吸入チャンバー内 ; 30~70%  
明暗サイクル : 12 時間点灯(8:00~20:00)/12 時間消灯(20:00~8:00)  
換気回数 : 検疫室 ; 15~17 回/時  
吸入試験室 ; 5~7 回/時  
吸入チャンバー内 ; 12±1 回/時  
圧 力 : 吸入チャンバー内 ; 0~-15×10Pa  
吸入チャンバー容積 : 1060L  
ケージへの動物の収容方法 : 単飼  
ケージの材質・形状・寸法等 :  
検疫期間 ; ステンレス製 2 連網ケージ (112(W)×212(D)×120(H) mm/匹)  
馴化期間 ; ステンレス製 6 連網ケージ (95(W)×116(D)×120(H) mm/匹)  
投与期間 ; ステンレス製 5 連網ケージ (100(W)×116(D)×120(H) mm/匹)

## (2) 飼料

飼料は、全飼育期間を通して、オリエンタル酵母工業(株) (千葉工場 : 千葉県千葉市美浜区新港 8-2) の CRF-1 固型飼料 (30KGy-γ 線照射滅菌飼料) を固型飼料給餌器により自由摂取させた。

なお、試験に使用した飼料の栄養成分についてはオリエンタル酵母工業(株)から自社分析データを使用ロットごとに入手し、保管した。飼料中の夾雑物については(財)日本食品分析センター (東京都渋谷区元代々木町 52-1) の分析データを使用ロットごとに入手し、試験計画書に規定した許容基準と照合して異常のないことを確認し、保管した。

## (3) 飲水

飲水は、全飼育期間を通して、市水 (神奈川県秦野市水道局供給) をフィルターろ過した後、紫外線照射し、自動給水装置により自由摂取させた。

なお、飲水は、試験施設として実施している定期サンプリングによる飲水を(財)食品薬品安全センター秦野研究所 (神奈川県秦野市落合 729-5) に依頼して、水道法を参考にして規定した項目について分析し、結果を試験計画書に規定した許容基準と照合して異常のないことを確認し、保管した。

## II-3 観察・検査項目及び方法

### II-3-1 動物の生死及び一般状態の観察

動物の生死及び瀕死の確認を毎日 1 回行った。

### II-3-2 体重測定



解剖時に体重を測定した。

### II-3-3 病理学的検査

#### (1) 解剖

各解剖期とも午前 10 時から 12 時の間に解剖した。

動物は、エーテル麻酔下で腋窩部の切断により放血屠殺した後、病理組織検査と遺伝子発現解析に供する臓器を肝臓、胸腔臓器の順に摘出した。開胸は肝臓の摘出後とし、胸腔臓器の摘出に先立ち RNA *later*® 2.0 mL を気管から肺に注入 (18G 針付き 2.5 mL シリンジを使用) した。摘出した胸腔臓器から気管、食道、心臓、胸腺、肺副葉を外して肺 (左肺と右肺) を採取した。解剖・臓器の摘出に際しては、遺伝子発現解析を妨げないよう、白衣、マスク及びヘアークャップの着用、動物の被毛や器具の清拭により術者の唾液・汗や毛髪等による汚染及び動物の被毛や消化管内容等による汚染が起きないように配慮した。麻酔からサンプリングの終了までの所要時間は 5 分以内とした。

#### (2) 剖検

全ての解剖動物について肉眼的に観察を行った。

#### (3) 臓器重量

全ての解剖動物について、肝臓の湿重量を測定した。

#### (4) 病理組織学的検査

全ての解剖動物の肺と肝臓について、10% 中性リン酸緩衝ホルマリン溶液で固定後、パラフィン包埋、薄切、ヘマトキシリン・エオジン染色し、光学顕微鏡で病理組織学的に検査した。

### II-3-4 サンプルの採取

#### (1) 肝臓からのサンプルの採取

全ての解剖動物について、下記の方法により、肝臓から遺伝子発現解析のための RNA 用サンプルを採取するとともに、病理組織検査用サンプルを採取した。

##### (1) -1 RNA 用サンプルの採取

生検用トレパン (5mm 径) にて肝臓の内側右葉 (胆嚢のついている葉) を 3 カ所打ち抜き、total RNA 精製用として別々のチューブ (あらかじめ風袋重量を測定済み) の RNA *later*® に浸漬し、氷上に移した。サンプル採取終了後、4°C に一晩放置後 -80°C で凍結保存した。

##### (1) -2 病理組織検査用サンプルの採取

外側左葉を門脈部で他の葉から切り離し、横軸方向に割入れし、外側左葉以外の葉と共に 10% 中性リン酸緩衝ホルマリン溶液で固定した。

## (2) 肺からの採取

全ての解剖動物について、下記の方法により、肺から遺伝子発現解析のための RNA 用サンプルを採取するとともに、病理組織検査用サンプルを採取した。

左肺と右肺をそれぞれ体軸方向に二分割（肺門側と末梢側）した。左肺と右肺の肺門側を病理組織検査用サンプルとし、左肺と右肺の末梢側を RNA 用サンプルとした。病理組織学的検査用サンプルは、薄切面を下にしてろ紙に貼り付けてから、10%中性リン酸緩衝ホルマリン溶液で固定した。RNA 用サンプルはサンプルチューブに入れ、液体窒素で凍結した。

### II-3-5 遺伝子発現解析のためのサンプルの保存

肝臓の RNA 用サンプルは 4℃で一晩保存後、超低温庫（-80℃）で凍結して委託者に返送するまで保存した。肺の RNA 用サンプルは、サンプリング時に液体窒素で凍結したものを超低温庫（-80℃）で委託者に返送するまで保存した。

## II-4 数値処理と統計方法

### II-4-1 数値の取り扱いと表示

各数値データは、測定機器の精度に合わせて表示した。

吸入チャンバー内の被験物質濃度は ppb を単位として測定し、表示した。

体重は g を単位とし、小数点以下第 1 位まで測定し、表示した。

臓器実重量は、g を単位とし、小数点以下第 3 位まで測定し、表示した。

なお、各数値データの平均値及び標準偏差は、上記に示す桁数と同様になるよう四捨五入を行い表示した。

## III 試験成績

### III-1 吸入チャンバー内の被験物質濃度

吸入チャンバー内の被験物質濃度を表 4 に示した。

吸入チャンバー内の被験物質濃度は、目標暴露濃度 0、70、200 及び 700 ppb に対し、測定値の平均±偏差（最低～最高値）は、それぞれ  $2 \pm 1$  ppb（1 ppb～4 ppb）、 $76 \pm 3$  ppb（73 ppb～82 ppb）、 $202 \pm 9$  ppb（191 ppb～219 ppb）及び  $695 \pm 19$  ppb（670 ppb～724 ppb）であった。

### III-2 動物の生死及び一般状態

全ての動物が、定期解剖時まで生存した。また、いずれの動物も特記すべき一般状態の変化を認めなかった。

### III-3 体重

解剖時の体重を表 5 に示した。

### Ⅲ-4 病理学的検査

#### Ⅲ-4-1 剖検観察

肺と肝臓の剖検所見を表6に示した。

いずれの動物も特記すべき変化を認めなかった。

#### Ⅲ-4-2 臓器重量

肝臓の実重量を表5に示した。

#### Ⅲ-4-3 病理組織学的検査

肺と肝臓の病理組織学的検査の結果を表7に示した。

いずれの動物も特記すべき変化を認めなかった。

### Ⅳ 遺伝子発現解析のためのサンプルの送付

遺伝子発現解析のための肺及び肝臓のRNA用サンプルは、2006年8月3日に、ドライアイスを含めて下記宛先に送付した。

〒158-8501 東京都世田谷区上用賀 1-18-1

国立医薬品食品衛生研究所 安全性生物試験研究センター

毒性部 五十嵐 勝秀

### 参考文献

- 1) McLafferty FW. 1994. Wiley Registry of Mass Spectral Data, 6th ed. New York: John Wiley and Sons.

表1 吸入チャンバー内環境の測定結果：温度（22時間暴露）

単位：℃

チャンバー	CH-1	CH-2	CH-3	CH-4
群	対照群	70ppb 群	200ppb 群	700ppb 群
全期間				
平均値	22.9	23.0	22.9	22.9
標準偏差	0.2	0.4	0.3	0.2
日別平均値				
7月25日	23.0	23.1	22.9	23.0
7月26日	22.9	23.0	22.8	22.9
7月27日	22.9	23.1	22.8	22.9
7月28日	22.9	23.0	22.9	22.9
7月29日	22.9	23.0	22.9	22.9
7月30日	22.9	23.0	22.9	22.9
7月31日	22.9	23.0	22.9	22.9
8月1日	22.9	23.0	22.8	22.9

表 2 吸入チャンバー内環境の測定結果：湿度（22時間暴露）

単位：%

チャンバー	CH-1	CH-2	CH-3	CH-4
群	対照群	70ppb 群	200ppb 群	700ppb 群
全期間				
平均値	54.8	54.8	54.0	54.0
標準偏差	1.7	2.0	2.0	2.7
日別平均値				
7月25日	55.3	55.3	54.3	54.3
7月26日	55.3	55.2	54.4	54.5
7月27日	54.6	54.8	54.0	53.9
7月28日	54.7	54.8	54.1	53.8
7月29日	54.7	54.7	54.1	54.1
7月30日	54.4	54.4	53.7	53.5
7月31日	54.7	54.6	53.9	53.8
8月1日	55.0	54.8	54.2	54.2

表 3 吸入チャンバー内環境の測定結果：換気量と換気回数（22時間暴露）

単位：換気量 L/min 換気回数 回/時

チャンバー	CH-1		CH-2		CH-3		CH-4	
	対照群		70ppb 群		200ppb 群		700ppb 群	
群	換気量	換気回数	換気量	換気回数	換気量	換気回数	換気量	換気回数
全期間								
平均値	212.4	12.0	212.2	12.0	212.5	12.0	213.1	12.1
標準偏差	0.7	0.0	0.9	0.1	1.8	0.1	2.8	0.2
日別平均値								
7月25日	212.6	12.0	212.9	12.1	212.2	12.0	213.1	12.1
7月26日	212.7	12.0	212.3	12.0	212.3	12.0	213.1	12.1
7月27日	212.1	12.0	211.2	12.0	211.1	11.9	212.2	12.0
7月28日	212.3	12.0	212.0	12.0	212.4	12.0	213.2	12.1
7月29日	212.5	12.0	212.4	12.0	213.2	12.1	213.5	12.1
7月30日	212.4	12.0	212.3	12.0	212.7	12.0	212.8	12.0
7月31日	212.5	12.0	212.5	12.0	213.2	12.1	213.6	12.1
8月1日	212.5	12.0	212.4	12.0	213.2	12.1	214.3	12.1

表 4 吸入チャンバー内の被験物質濃度 (22時間暴露)

単位: ppb				
	対照群	70ppb群	200ppb群	700ppb群
7月25日午後0時から7月26日午前10時	4	75	201	670
7月26日午後0時から7月27日午前10時	2	74	203	684
7月27日午後0時から7月28日午前10時	2	73	206	689
7月28日午後0時から7月29日午前10時	1	73	191	693
7月29日午後0時から7月30日午前10時	2	76	194	688
7月30日午後0時から7月31日午前10時	2	76	200	724
7月31日午後0時から8月1日午前10時	1	82	219	717
平均濃度	2	76	202	695
標準偏差	1	3	9	19

表 5 解剖時体重及び肝臓重量 (22時間暴露)

1日目解剖

群	動物番号	解剖時体重(g)	肝臓重量(g)
対照群	1001	29.5	1.694
	1002	28.3	1.620
	1003	27.6	1.606
70ppb群	1101	27.9	1.464
	1102	29.1	1.547
	1103	30.3	1.838
200ppb群	1201	26.4	1.351
	1202	28.6	1.515
	1203	28.1	1.661
700ppb群	1301	27.0	1.512
	1302	27.2	1.433
	1303	28.1	1.463

## 3 日目解剖

群	動物番号	解剖時体重(g)	肝臓重量(g)
対照群	1004	27.5	1.541
	1005	27.6	1.626
	1006	29.6	1.534
70ppb 群	1104	25.8	1.410
	1105	30.2	1.687
	1106	26.1	1.298
200ppb 群	1204	26.6	1.412
	1205	27.3	1.438
	1206	27.0	1.293
700ppb 群	1304	28.8	1.716
	1305	29.6	1.704
	1306	28.1	1.423

## 7 日目解剖

群	動物番号	解剖時体重(g)	肝臓重量(g)
対照群	1007	27.7	1.465
	1008	27.1	1.489
	1009	28.0	1.619
70ppb 群	1107	28.9	1.590
	1108	27.9	1.578
	1109	28.5	1.675
200ppb 群	1207	28.5	1.494
	1208	27.8	1.494
	1209	25.8	1.320
700ppb 群	1307	28.6	1.555
	1308	28.0	1.586
	1309	28.5	1.617

表 6 剖検所見 (22時間暴露)

1 日目解剖

群	動物番号	肺	肝臓
対照群	1001	著変なし	著変なし
	1002	著変なし	著変なし
	1003	著変なし	著変なし
70ppb 群	1101	著変なし	著変なし
	1102	著変なし	著変なし
	1103	著変なし	著変なし
200ppb 群	1201	著変なし	著変なし
	1202	著変なし	著変なし
	1203	著変なし	著変なし
700ppb 群	1301	著変なし	著変なし
	1302	著変なし	著変なし
	1303	著変なし	著変なし

3 日目解剖

群	動物番号	肺	肝臓
対照群	1004	著変なし	著変なし
	1005	著変なし	著変なし
	1006	著変なし	著変なし
70ppb 群	1104	著変なし	著変なし
	1105	著変なし	著変なし
	1106	著変なし	著変なし
200ppb 群	1204	著変なし	著変なし
	1205	著変なし	著変なし
	1206	著変なし	著変なし
700ppb 群	1304	著変なし	著変なし
	1305	著変なし	著変なし
	1306	著変なし	著変なし

## 7 日目解剖

群	動物番号	肺	肝臓
対照群	1007	著変なし	著変なし
	1008	著変なし	著変なし
	1009	著変なし	著変なし
70ppb 群	1107	著変なし	著変なし
	1108	著変なし	著変なし
	1109	著変なし	著変なし
200ppb 群	1207	著変なし	著変なし
	1208	著変なし	著変なし
	1209	著変なし	著変なし
700ppb 群	1307	著変なし	著変なし
	1308	著変なし	著変なし
	1309	著変なし	著変なし

表 7 病理組織所見 (22時間暴露)

## 1 日目解剖

群	動物番号	肺	肝臓
対照群	1001	著変なし	著変なし
	1002	著変なし	著変なし
	1003	著変なし	著変なし
70ppb 群	1101	著変なし	著変なし
	1102	著変なし	著変なし
	1103	著変なし	著変なし
200ppb 群	1201	著変なし	著変なし
	1202	著変なし	著変なし
	1203	著変なし	著変なし
700ppb 群	1301	著変なし	著変なし
	1302	著変なし	著変なし
	1303	著変なし	著変なし



## 3 日目解剖

群	動物番号	肺	肝臓
対照群	1004	著変なし	著変なし
	1005	著変なし	著変なし
	1006	著変なし	著変なし
70ppb 群	1104	著変なし	著変なし
	1105	著変なし	著変なし
	1106	著変なし	著変なし
200ppb 群	1204	著変なし	著変なし
	1205	著変なし	著変なし
	1206	著変なし	著変なし
700ppb 群	1304	著変なし	著変なし
	1305	著変なし	著変なし
	1306	著変なし	著変なし

## 7 日目解剖

群	動物番号	肺	肝臓
対照群	1007	著変なし	著変なし
	1008	著変なし	著変なし
	1009	著変なし	著変なし
70ppb 群	1107	著変なし	著変なし
	1108	著変なし	著変なし
	1109	著変なし	著変なし
200ppb 群	1207	著変なし	著変なし
	1208	著変なし	著変なし
	1209	著変なし	著変なし
700ppb 群	1307	著変なし	著変なし
	1308	著変なし	著変なし
	1309	著変なし	著変なし

アバンダンス

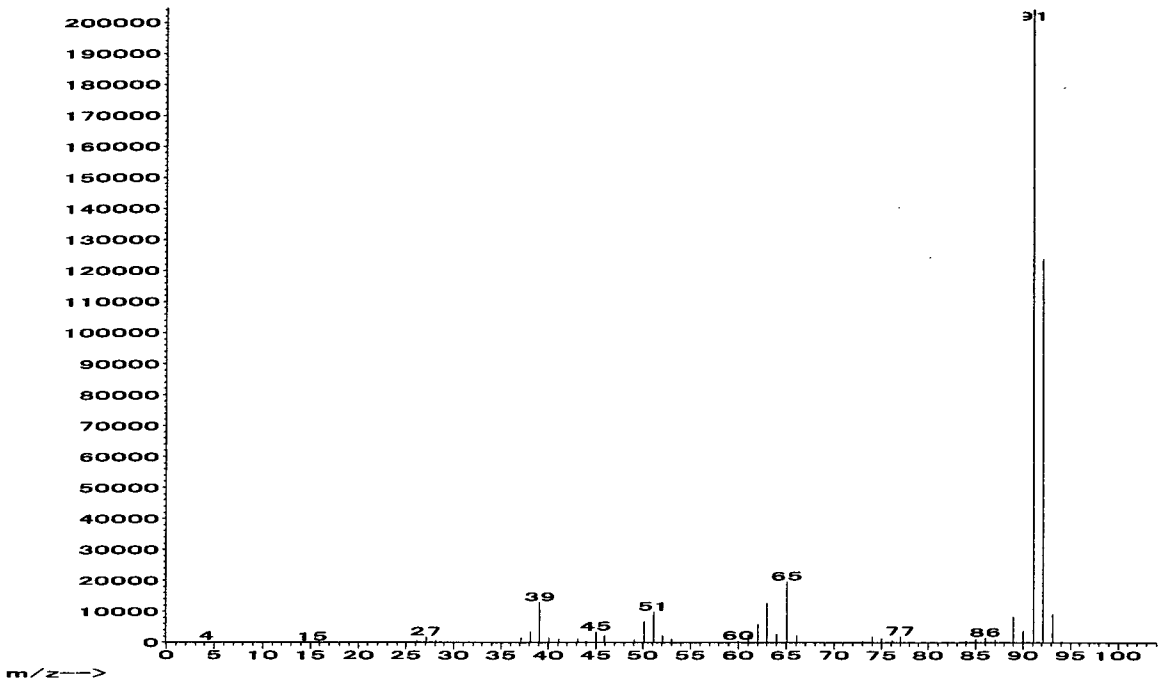


図 1 被験物質の特性 (22時間暴露)

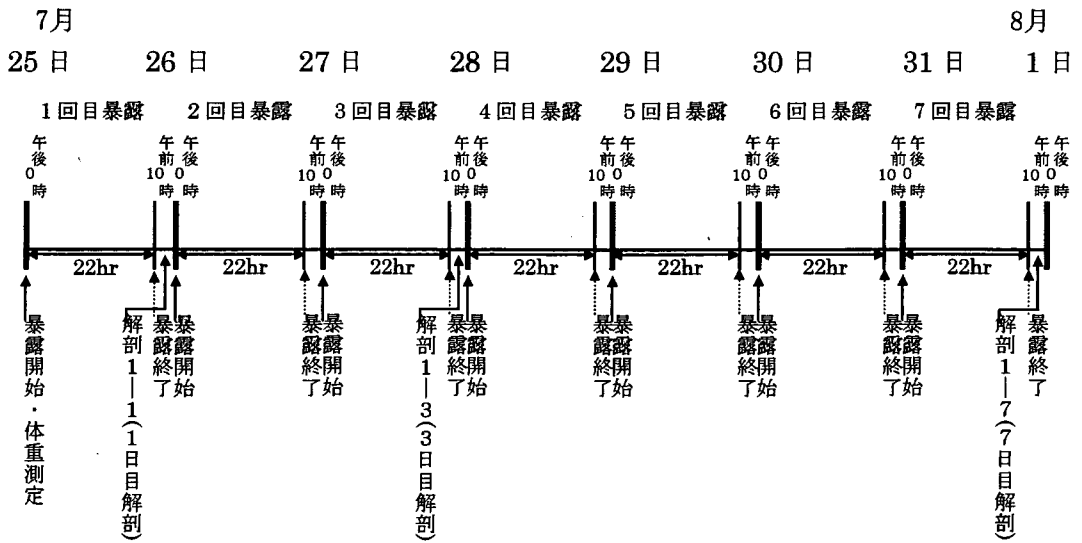


図 2 試験スケジュール (22時間暴露)

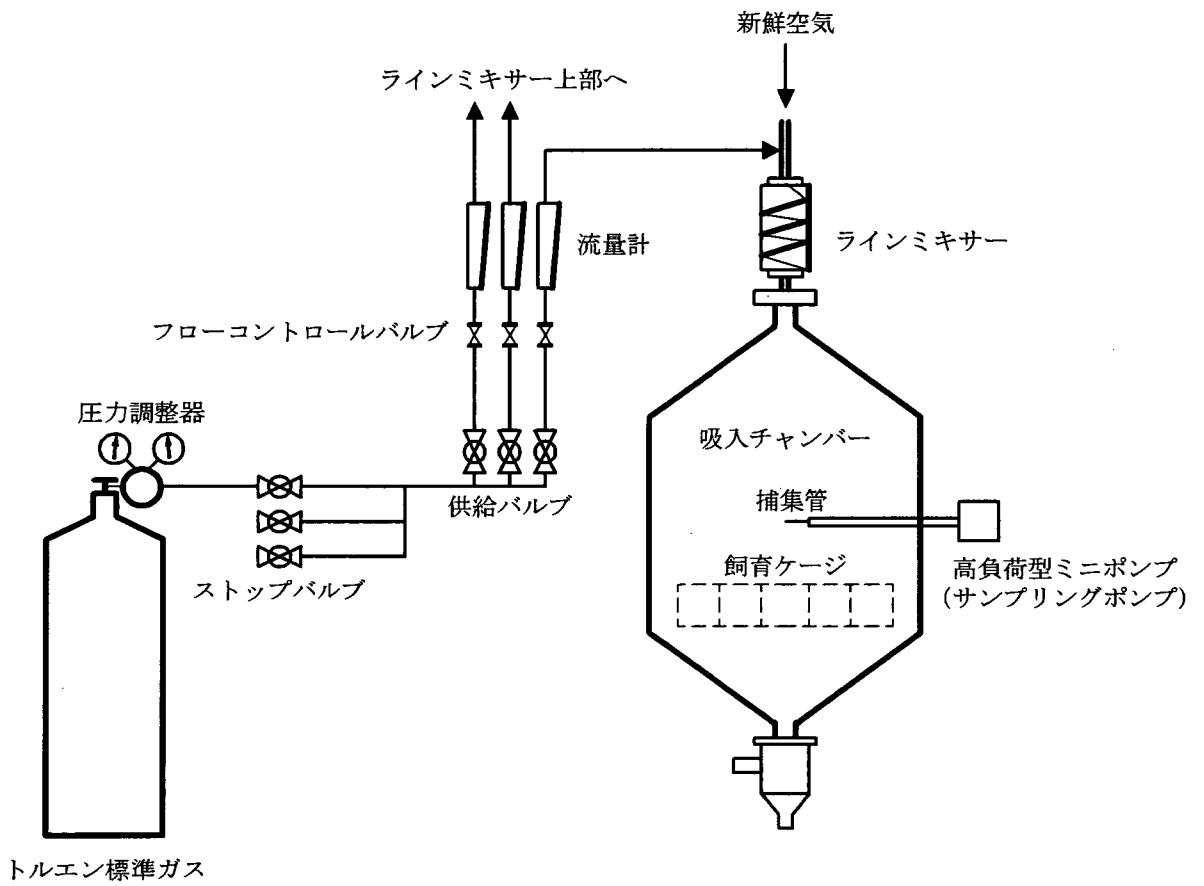


図 3 吸入装置のシステム

## 委託研究報告書

### Ⅲ) キシレンのマウスを用いた極低濃度暴露試験報告書

(6時間/日、7日間暴露)

試験番号：0699

CAS No. 1330-20-7

中央労働災害防止協会

日本バイオアッセイ研究センター